

## 青森・八戸市に新たな美術館オープン

気付けばもう師走。今年も昨年同様、世界中がコロナ禍に踊らされ、泣かされた1年だった。ほんの夏ぐらいいまでは馴染みの飲食店に顔を出すもはばかり、県境を超える移動は論外とされたのだが、ワクチン接種が進んだ今は感染者が劇的に減っている。わが青森県でも感染者ゼロの日が普通になり、徐々に「乾杯」の掛け声も戻りつつあるようだ。

「第6波」の懸念がある。状況は決して楽観できないだろう。それでも、やっと「次のステージ」を考える余裕が生まれたこの時を、感謝の思いで噛みしめたい。

見渡せば、地方でも小さな変化が始まっている。地元・八戸市の中心街、市庁舎周辺の風景がこの秋、一変した。市は老朽化が進む市美術館を取り壊し、約32億円かけて新たに建設し直した。地上3階建て、延べ床面積は4586平方メートルで、旧施設の3倍の広さ。付随して美術館の周辺を、市民が集える広場として約2億円を投じて整備している。

新しい市美術館は「ジャイアントルーム」と名付けられた巨大な空間を中心に、いくつかの展示スペースで区切られている。市民にとって敷居の高い施設ではなく、逆に市民が自由に集まり、アートを通じてさまざまな取り組みを展開してほしいといった思いが込められているという。オープン記念として地元最大のイベント・八戸三社大祭を切り口にした展示会が開催中。写真家の浅田政志さんら著名アーティスト11人が参加した。来年2月までの予定で、開館初日の11月3日は大勢の市民が詰めかけた。

もちろん、こうした施設は作れば終わりではなく、今後の運営・活用に全てがかかっているはず。個人的には、市民だけでなく全国の行楽客が気軽に足を運びたい空間に育ってほしい。「with」なのか「after」なのか、コロナとの新しい付き合い方を前提とした誘客競争が日本各地で本格化する。2022年がその幕開けの年になればいい。

デーリー東北新聞社 地域ビジネス局長 吉田晃



八戸市美術館の内部。オープン初日は多くの市民が足を運んだ  
=2021年11月3日



新しい八戸市美術館。コロナ後の世界で、市民にも観光客にも愛される施設になれるか